



心が育つという事

「意思」を育てる

豊田一秀

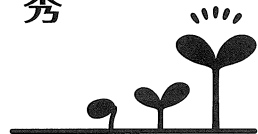
はじめに

前回、本誌に「心が育つということ」という題名の下、連載を執筆する機会を得たのは、一九九〇年六月号からであるから、かれこれ、ふた昔以上も前のことである。当時、私は保育者として幼稚園で担任をしていた。時が流れ、現在、私は大学において教員養成の仕事に就いている。仕事の内容は変わったが、常に私の心には「心が育つ」という、あいまいな言葉がモヤモヤと存在している。

今回の連載にあたり、表題に「続」という言葉を足して、幾つかの切り口と共に「心が育つということ」について再び考えてみたい。

「癖になる派」対「気が済む派」の飽くなき争い

家庭であれ保育の場であれ、大人は無意識のうちに「癖になる」または「気が済む」、どち



らか一つのキーワードで子どもに対応しようとしている場合が多いように私には感じられる。それぞれの考え方は、普段は、大人自身にもはっきりと意識されることは少ないが、子どもに対する時のみならず、人間の心の育ち全般に対するわれわれの態度となつて現れてくる場合も少なくはない。二つの「派」の考え方を見てみよう。

まず、「癖になる派」の主張のあらましは以下のようなものである。①人は易きに流れようとする基本的傾向を持つ。②人は癖がつきやすいので、良い癖がつくよう、悪い癖がつかぬように常に考えなくてはならない。③「癖」とは、習慣によつて反復的に行動できるようになることである。④「癖」をつけるためには繰り返しが必要で、例外をつくつてはいけない。⑤「癖」はアメとムチによつて形成される。⑥人は目に見える「行い」によつて評価される。次に「気が済む派」の主張を見てみよう。この主張は以下のようなものである。①人は、気が済めばその行動をしなくなるものである。②気が済む＝満足によつてその事柄を「卒業」させてしまうことが、結局は人間が変わる・育つにあつたての確かな道であり、近道である。③我慢をさせて子どもの表面的な行動を規制しても、心の中ではその事柄を卒業できていないので、規制が無くなった後にはすぐに元の行動に戻ってしまう。④その行動がしつこく続く場合は、過去において満たされるべき事柄（卒業しておくべき事柄）が、何らかの事情によつて満たされていないためと考えられる。⑤規制を緩め、発散させ、早く「卒業」に導くことが大切である。⑥行動よりも行動を起こす基にある心の存在に重きを置く。「癖になる派」の人々は、良い癖がつくよう、悪い癖がつかないよう必死である。「抱き癖」がつかぬよう子どもの言いなりにならない。歯磨き、宿題、食事を残さない。自分のことは

自分でする……良い癖がつくためには、いつも一貫した親の態度が必要であると考えるので、例外をつくることには否定的で、杓子定規しゃくし的な規則正しい日々が待ち受けている。

一方で「気が済む派」の人々は楽天的であり、あきらめめつである。今、注意しなくてもいつか時が来れば自然に……と、子どもとの対決を避ける傾向がある（この両派の主張の陰に、行動主義的な考え方と、精神分析的な考え方の「におい」を感じる読者もいるのではないか）。

第三の道

人間の行動は「癖」によって形作られていくものなのであろうか。それとも、満足感を得ることや、過去の不充実を穴埋めすることによる満足・発散を基本とした「気が済む」ことによって形作られていくものなのであろうか。社会を見回した時、「癖になる派」「気が済む派」の主張がそれぞれ人間の一面を語っていることは事実であらう。しかし同時に、これら二つの尺度のみで人間を見る危険性もあるように感じる。

そこで、私は第三の道として「意思を育てる」という視点を持つことが重要だと考える。意思とは、自らの力で自分を操ろうとする時の源泉である。意思は時に自分を律し、また、時に自分を許す。

意思が育つ基にあるモノは、第一に自分の意思に対する気付きであり、肯定感であり、さらには言えば自己の能動性に対する信頼であらう。「意思」は、以下のように人に作用できる。

①人は悪い癖から抜け出すこともできるし、逆に良い癖を崩すこともできる。
②人は快を求めている存在であるとしても、その快の質を利己から利他へ高めることもできる。
③人は満

足できないことでも、我慢しなければならぬこともある。

意思の育ちはこんな小さな日常の中にも存在する。自分でスプーンを使い始めた赤ちゃんが、食事中に何度も何度もスプーンを床に落としている。赤ちゃんは自分の手を見つめながら、真剣な顔で手を開く。スプーンは床に落ち、カチヤンと音を立てる。赤ちゃんは母親に拾ってくれとせがみ、母親がせっかく拾ってあげても、また落とす。その繰り返し……。

赤ちゃんの名誉のために付言するが、赤ちゃんは母親の忍耐を試しているわけではないであろう。赤ちゃんは、発見したのだ。手を開くとスプーンが手から落ちるということを。そして、自分の手を自分の意思で開く喜び、手を開くと思いどおりにスプーンが落ちてくれ、期待した音を立てるといふ面白さを。さらに、目前から消えてしまったスプーンが母親に頼めば手元に戻ってくる確かさを……。

自分の思ったとおりに事が起こる心地よさを通して自分の意思の存在を知る。これを、赤ちゃんが「自分が世の中を変えられる体験」(能動性の体験)をしていると言ったら大げさに過ぎるだろうか。「自己存在の肯定的把握」と言ったら我田引水に過ぎるであろうか。

スプーン落としを許すと、食事の悪い癖がついてしまうと考えるのではなく、また、スプーン落としに我慢して目をつぶってあげれば、いつか赤ちゃんがそれを「卒業」するとあきらめてしまうのでもない、第三の道……。赤ちゃんの意思を育てる援助、すなわち、赤ちゃんの発見や喜びに対する共感的理解が大人に求められているのだと思う。

身近な大人が、子どもの行動に意味を見いだそうとする、その態度に支えられ、子どもは初めて自分の意思の存在を肯定的につかみ取れるのではないだろうか。

(玉川大学)